

Title	明治大正史、四、世相篇(柳田國男編著, 朝日新聞社發行)
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.146(700)- 148(702)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を研究し、殊に歌道にありては其の奧秘に精達し、歌集「雪玉集」を残され、又古今傳授に於ては忘るべからざる一人で、我が文學史上不朽の人物である。

本書は、上宮廷の小事より下文藝社會の雜事に至る迄、細大遺漏なく、讀者をして自ら遠く數百年の昔に生き、宛然として當時の世態の目前に回轉するの感を抱かしめる。猶ほ、本書の印刷に當りては公の遠孫伯爵嗣子公正氏等、其の原本に就いて嚴密なる校訂を加へられしものなれば、從來影寫本等の難解に苦しみたる學徒には無限の天幸と謂ふべきである。

因に實隆公の後裔には才學の士相繼いで輩出し、後世に諸書を残し、殊に幕末國歩艱難の秋には、七卿落の一人として知られる季知卿出て、尊王攘夷を唱道し且つは復古の大業を翼賛し、明治昭代にあつては、歌道を以て明治大帝に側近し、後、大宮司として神宮奉仕せられ、其の養孫實義伯亦現に大宮司の職にあり、又其の嗣子公正氏は新進文學士で、既に國史國文に關する諸研究を發表せられ、又現に宮内省圖書寮にあつて大正天皇の御實錄の謹修に従事せられて居る。これ眞に名實兼備の皇室藩屏として敬すべきである。

終に、本書を刊行せられし、實美伯爵並に、校訂に當られし嗣子公正氏等に滿腔の敬謝の意を表して擱筆するものである。

(昭和六、九、十、武田勝藏記)

### 明治大正史、四、世相篇

(柳田國男編著)  
(朝日新聞社發行)

明治初年の吾が國の急激なる歐化主義政策と維新後の舊習一洗の思潮は、一時は保守的反動の機運さへ巻き起し、新舊思潮の衝突はあらゆる方面に過渡時代相を現出するに至つたけれども、時の推移は容赦なく押し進み、大勢順致の勢はひた押しに吾等を驅り立て、明治より大正に至る六十年間に政治に、經濟に、社會組織に、産業に、風俗習慣に目まぐるしい程の激變を引き起したことは、世人の既に實驗した所である。併しこの明治大正の吾が建設準備期も、今や一定の固有文化層を固定しかけて過去の歴史の一時期に参加せんとするに至り、人々は今更の如く此の過去六十年の歴史を物珍しく回顧せんとするに至つた。此の大勢を知つてか、知らずか、近頃やうやく一部の歴史家のうちには各の専門とする所に向つてこれが新資料の涉獵にいち早く取りかゝつたことは、行き詰れる感のある吾が國史の學界にも、喜ばしい新展開の曙光を認め得る前兆である。歴史家は過去現在將來の前後に眼をくばるべきものであるとすれば、唯に茫洋たる古代の討究にのみその忠實を誇るべきものでなくして、過去を討究する態度で、同時に現代人の昨日今日の足跡をも討査して、過去と現在と將來との繋がりとの比較と關聯を求めるときは、歴史の研究にきり必要缺くべからざる要件である。吾人の生活と最も親しかるべき國史をして、餘所餘所しい、縁遠いもの、如く思はしむるに至つたのは、一部の國史家の罪でもあつたのであるから、研究家も此の點に顧慮してもつと自然科学者の如き態度と方法を以て、日常ありき

たりの平凡なる事相の研究に向つて邁進すべきである。此の點に於て吾等は却つて土俗學研究者の態度や方法に暗示と示教を受けることが多い。

本書は先に東京朝日新聞社に依つて計畫されて、最近やうやく出版完結されたる六卷より成る明治大正史の第四篇に屬する柳田國男氏の編著にかゝるもので、明治大正の吾が世相史であつて、最近六十年間に於ける吾が國民の人情、風俗、習慣の變遷の跡を土俗學的に、極めて平明に取り扱つて、其の進化の經路を一目瞭然たらしめんとしたるもので、著者の序文に於ける謙遜にも拘らず、其の出來ばえの豐なることは、同叢書中特に頭角を現してゐると思ふのであつて、これ私がこゝに本書を紹介する理由である。併し、時間の切迫の爲に十分その内容を茲に紹介することは到底むづかしい。御容赦を願ふ。

自序に若し採集と整理と分類と方法とへ正しければ、自然史に於ける如くに、人間史の側でも、現代生活の横斷面、即ち毎日吾々の眼前に出ては消える事實に據つて、立派なる歴史は書けるものだといふ野望を懷いて——これを今回新しく試みたと言はれてゐるやうに、本書はその計畫に於て、大いなる準備と自信とを以て臨まれたものらしい。先づそれが爲に約一年間過去六十年の全國各府縣各時期の新聞に眼を通し、莫大なる切抜を用意されたわけでも、著者の資料採集の骨折に敬服するのであるが、本書の御手柄はその點にあるのではなく、著者がこの平凡極まる新聞記事より採集したる莫大なる資料を如何に整理し、分類し、比較し、撰擇して此を如何にして統一ある論評形式にもたらしめたかといふ點に

先づ第一に本書の眞價なり、著者の技倆なりを窺ひ得ると信ずる。自序に「此の書が在來の傳記式歴史に不滿である結果、故意に固有名詞一つでも掲げまいとした。従つて世相篇は英雄の心事を説いた書ではなく、國に遍滿する常人といふ人が眼を開き、耳を傾ければ、視聽し得るものゝ限り、さうして只少しく心を潜めるならば、必ず思ひ至るであらう所の意見だけを述べたのである」と言はれてゐるやうに、其の研究の方法と目的とが、科學的にしてよく吾人の現實の生活に則してゐるといふ點が、第二に目立つてゐる本書の特色である。

第三に目立つてゐる本書の特色は、著者がこの明治大正の世相進化の有様を、極めて平明なる實驗的歴史に再現せんが爲に試みられたる色々の立論的形式である。先づ第一章に於ては、色音論といふ立論形式によつて、吾が國の色彩文化の變遷と被服進化の關係を叙し、我々の衣服が次々に其の材料を増加し、色や形の好みの推移の跡歴然として残れることを叙し、それから音響文化の變遷と騒音との關係を叙し、更に第二章第三章以下にては食住論といふ立論形式をとつて、食物料理の變遷、住居の變遷より生産と商業の變遷を叙してゐるが、その間にも各章至る所に土俗學者らしい著者獨特の素朴なる幼兒の幻想と印象とを豊富に取り込んで本書の立論をして理解に容易ならしむると同時に、無味乾燥の弊に陥りやすいことを未然に防止し得てゐる點は、第四の本書の特色であらうと信ずる。

此を要するに明治維新後急激なる世相の變化の一部分を見て、急に輸入されたる洋風にも、最初から幾分の和習を加味して

ある形跡が十分認められる。このことが單なる西洋模倣萬能の歐化主義でなかつた證據である。況んや文學、思想、法政の如き吾人の一層大なる關心事に關しては、此が輸入に方つて、非常なる用意と準備とを要したことは當然であつた。兎に角本書の各史實に對する評論の適否については今別として編纂著者の技術と見識とに對しては謹んで敬意を表せざるを得ない。今一讀後の感想を述べんとして餘り簡單に失して十分當初の本意を達し得なかつた點は特に了せんことを切望する。(山本光郎)

### 教區設定朝鮮天主教史料展覽目錄

(京城天主教會發行)  
(非賣品)

日本に於ける天主教の歴史は、支那のそれに稍々先んじてゐる。(唐代に於ける異教傳來については今暫くいはぬとして)。而して日本支那の間に介在する朝鮮に於ける天主教の傳來は更におくられた。而も朝鮮のそれは、不思議にも、地續きなる支那から傳はらずして、一葦帶水を距てた日本から傳はつた。朝鮮の役を契機としてセスパデスの渡鮮が發端をなしたのである。爾來、天主教を介して日鮮の間に信仰上の深い交りがあつたやうである。殊に日本に於ける鮮人捕虜は當然その哀れなる運命から、人類の平等を説く天主教にすがり、その信仰は以外に堅く、井上筑後守をして「朝鮮人吉利支丹ニ勸メ被入候而ハ、男女トモニヲモヒ入深ク、コトニ女聞入候ヘバ思入深ク候事」と述懐させてゐるほどで、屢々の殉教にも毎度朝鮮人の名が見える。又燒物師の五郎八が切支丹で

あつたと傳へられるが、鮮人捕虜が主に従事した陶器師の方にこの關係を求めたら面白からうと自分は日頃考へてゐる。

それにつけても、日本の切支丹史が段々研究されて明瞭になつて行くと共に、朝鮮のそれが之と並行して鮮明になつて行くことは願はしい事である。近時、青丘學會發行之「青丘學叢」に毎度朝鮮の天主教史に關する研究を發表されつゝあるが、こゝに紹介する展觀目錄は、京城天主教會の布教百年紀念に際し青丘學會の後援を得て去る九月二十六、七の兩日同教會にて展觀された布教、殉難、迫害に三大別して擇ばれた三十三種の文獻及びその參考資料、並に往來教徒の熱烈なる信仰の遺薰を偲ぶべき遺物五種、計三十八點の目錄である。勿論布教百年紀念とある通り十九世紀に入つてからの布教、迫害事實に關するものが主であるが、我々その方面に暗き者にまつては、單に書名を知るだけでも教へられるところが多い。

この目錄は本「史學」發行所に數十部、寄贈されてあるから、希望者には多分分けて貰へると思ふ。(吉田小五郎)

### 土御門天皇と御遺蹟

(武田勝藏著)  
(御所神社奉讃會發行)

本書は本年十一月十三日は、土御門天皇七百年の式年祭に當るを以て、天皇の御遺徳並に御遺蹟を顯彰し奉るため徳島縣板野郡御所村行宮址の御所神社奉讃會の委嘱により編纂せられたものである。次に内容を紹介し、著者並に奉讃會の勞に報いたいと思ふ。